

互いのよさを認め合い、輝くことのできる児童の育成

かかわり合う活動と振り返る活動の充実を通して

日の出町立平井小学校

校長 森田 哲生

1 研究主題設定の理由

(1) 研究の変遷

近年の社会状況は、激しい変化から予測困難な時代を迎えている。教育現場においては、いじめや自殺、不登校問題の深刻化などの課題がある。その解決に向けて、教育振興基本計画をはじめとする各種答申の策定や組織体制の整備を進めている状況である。

本校では、令和3年度より国語科で研究を進めてきた。しかし、過去5年間の研究の成果及び課題を明らかにしていく中で、教科指導の研究よりも、学習の主体である児童の心の成長を重視すべきだという結論に至った。児童の心を育むことが、学習への主体性や学校生活の充実につながり、ウェルビーイングを実現できると考えた。そこで、本校では、児童の心の育成に重点を置き、令和5年度より「心の教育」を中心に研究に取り組むこととした。

(2) 研究主題の捉え方

本校では、日の出町教育委員会の示す「日の出町教育ビジョン2023」を基に作成された学校経営方針の具現化並びに学校スローガン「心を見がき ちがいを力にかえる学校」に帰着することで、教育目標の重点である「心やさしい子」の実現を目指している。また、本校の実態調査を基にした教員の願いとして共有されたのは「様々なことに挑戦してほしい。」「自信をもってほしい。」「関わり合う中で豊かな人間関係を築いてほしい。」であった。そこで、本校では校内研究を通じて、心の育成に主眼を置く研究（児童の心の成長を促し、自己肯定感の向上を目指す）、教科に縛られない研究（多様な教育活動の中で心の育成を進める）を基本方針とし、「かかわり合う活動と振り返る活動を充実させることで、自己肯定感を高めること」に焦点を当てることとした。

「心の教育」を推進することで、児童が温かい雰囲気、互いを思いやる心をもって、自他の多様性を認め合うことのできる「かかわり」を充実させ、過去から今へ、今から未来へ学びをつなげることのできる「振り返り」を生かして自己の心を磨くことを目指していく。

2 研究の方法

(1) 研究仮説

全教育活動において、「かかわり合う活動」、「振り返る活動」を充実させることができれば、互いのよさを認め合い、輝くことのできる児童が育つであろう。

(2) 目指す児童像（研究主題に準ずる）

自分を見つめ、ありのままの自分を認めることができる児童

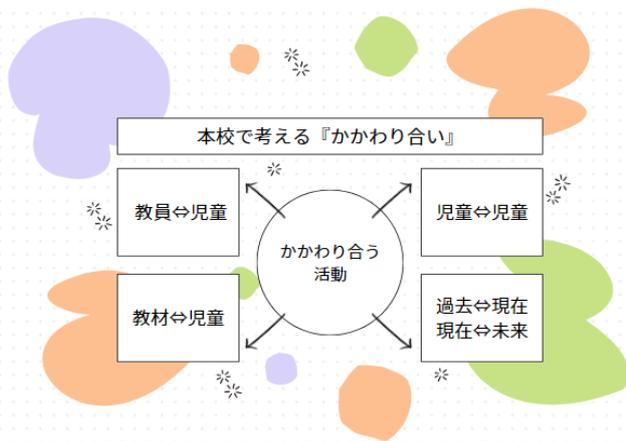
自分の思いを伝え、他者の思いを受け止めることができる児童

自分のよさを発揮することができる児童

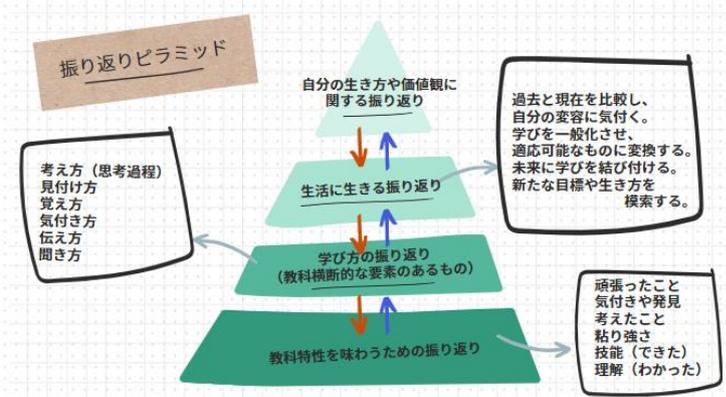
(3) 研究の視点

① かかわり合う活動

かかわり合う視点は、四つのものに分けられると考えた。児童の実態や学級経営状況、教科特性や学習内容に応じて、視点を選択しながら実践することで、指導の個別化や学習の個性化による個別最適な学びと他者と協働しながら必要な資質・能力を育成する協働的な学びの一体的な充実を図ることができるようにした。



本校で考える振り返りの形



② 振り返る活動

自分の行動や状況、取り組んだ活動を振り返り、そこで起きたこと（見聞きしたこと・気付き・考え（思考過程）・学び）を整理する。そして、得た学びを日常生活に生かすために一般化する。一般化された学びを適応し、「自分はどうか生きるか」に結び付けることができるようにするというステップを踏んだ振り返り活動ができるようにした。

(4) 検証方法

① 実態調査

研究結果の検証として行うために、内閣府が令和5年3月に発表した「こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）」を基に、6項目に関する調査を年2回（6月、11月）実施した。

設問種類	番号	質問項目	調査する視点
自己認識に関する設問	①	今の自分が好きだ	自己肯定感
	②	自分は親から愛されていると思う	保護者との関係
	③	うまくいかないことにも頑張って取り組む	粘り強さ
	④	自分は役に立たないと思う	自己有用感
研究主題等に関する設問	⑤	友達とかかわることができる	他者とかかわり合う力
	⑥	自分のことを振り返ることができる	自分を振り返る力

3 研究の内容

(1) 第5学年 特別活動「PA（プロジェクトアドベンチャー）」

① PAの魅力（児童同士のかかわり）

グループ内で他者とかかわりながら課題解決を図り、協力することの大切さを感じることで授業を設定した。

② PAのねらい（教材と児童のかかわり）

集団で心をついにそろえること、コミュニケーションを取り合わないとうまくできないことを体験し、実感すること。

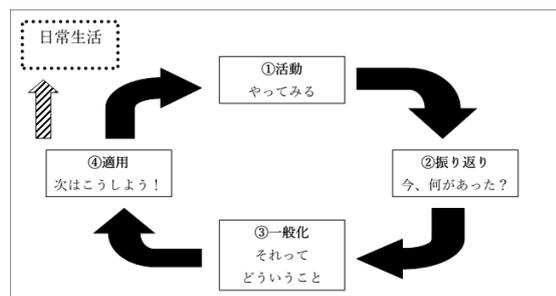


③ 教員のファシリテーション（教員と児童のかかわり）

「PA」における教員の役割はファシリテーターである。活動の様子から全体で話し合う機会の設定、合意形成を促すなど、その場の参加者が感じていること、思いや考えを引き出したり、話し合いを円滑に進行したりする役割を担うことで、児童の自主性、主体性を育むことにつながった。



④ 振り返りジャーナル（生活に生きる振り返り、自分の生き方や価値観に関する振り返り）



☆まず、何があったかをしっかり振り返ること。まじめに、自分が何をしたか、グループがどうなったかを思い出すこと。（振り返り）
☆そこで自分が行ったこと、グループで起こっていたことについて、それはどういうことなのか、そのことからどういうことがいえるのか説明できること。（一般化）
☆一般化で見付けたことを、次にどのように生かすか考え、実行するために必要なことを決めること。次に行うときにはどう行いか決めること。目標を決めること。（適用）

⑤ 児童の様子

ア PAにより、児童がすすんでかかわり、合意形成を図ろうとする必然性が生まれた。

イ 様々な学習内容（アクティビティ）を経験することで、以下の変容が見られた。

（ア） 児童はかかわり合いながら、試行錯誤することの大切さやよさに気付くことができた。

（イ） 課題解決へ向けて集団で心をついにそろえること、コミュニケーションを取り合わないとうまくできないことを体験し、実感することができた。

（ウ） 自分にできることや役割は何なのかを思考し、行動に移すことのできる児童が増えた。

ウ 教科に捉われずに行う振り返りを「振り返りジャーナル」で行った。活動を継続する中で文章力の高まりや思考の深まりも感じる事ができた。

エ 全体で意見を出せていなかった児童も、ノート（振り返りジャーナル）に思いを表出させることができていた。人とかかわることを、自らの生き方に照らして深く考えることができた児童もいた。

(2) 第4学年 算数「倍の見方」

① よりよい課題（教材と児童のかかわり）

児童にとって魅力的な課題との出会いを意図的計画的に設定することが必要だと考えた。本時では、教室内を海に見立て、生き物の親子の大きさを比べるという課題を設定し、すすんで活動に参加できるようにした。



② 児童の自然なかかわり合い（教員と児童、児童同士の複合的なかかわり）

児童は、一種類の元になる子のイラストを持って活動を始める。記入欄が複数あるワークシートを配ることで、別の動物の大きさを確かめるためには、それぞれのイラストを交換する必要がある。そこで、教員が他の児童の考えや課題解決の様子に目が向くように言葉掛けをすることで、自然と児童同士の交流が生まれるよう働きかけた。

③ 児童の様子

- ア 一人一種類の生き物のイラストを調べた後に、記入欄が複数あるワークシートを配ることで、別の動物も確かめたいという意欲につながり、自然と児童同士の交流が生まれた。
- イ 題材の提示の仕方を工夫することで、児童一人一人が課題に向き合うことができ、安心して学習に取り組んだり、自信をもって活動したりすることにつながり、意欲的な姿を引き出すことができた。

(3) 第2学年 特別活動「学級会」

① 伝え合い、受け止め合える学級会（児童同士のかかわり）

学級会では、必然的に自分の意見を「伝え」、友達の意見を「聞く」状況が発生する。児童自身が主体となり、会の進行や話し合いを行うことで、かかわりながら合意形成を図り、協力することの大切さが感じられる授業を設定した。

② 話し合いカード（学び方の振り返り、生活に生きる振り返り）

本時では、自分自身の活動を振り返るために、「話し合いカード」で以下の3点を記入し、口頭で発表させることで、教科横断的な学び方や自分自身について振り返る力（メタ認知）の育成を目指した。

- ア 自分自身の頑張りのパラメーター化（前後の活動と比較）
- イ 自分のよかったところを一言で書く（具体的な言葉で振り返る）
- ウ きらきらさん見付け（多様なよさの発見と共有）



③ 児童の様子

- ア 発表の停滞、否定的な意見への偏り、提案理由から逸れた場合に教員が介入するタイミングをリスト化し、精選したことで一般化できた。
- イ 伝えることと受け止めることが明確に分けたことで、児童は安心して活動に参加できた。
- ウ 振り返りの記入方法を工夫したことで、低学年でも振り返りを充実させることができた。

4 研究の成果と課題および課題に対する取組状況

(1) 研究の成果

① 実態調査結果（質問紙調査 平井小学校児童 6月：286人 11月：296人）

	6月実施				11月実施			
	A	B	C	D	A	B	C	D
①今の自分が好きだ	32.9%	31.5%	18.2%	12.6%	38.5%	33.1%	18.6%	8.8%
②自分は親から愛されている	72.4%	18.9%	2.8%	4.2%	72.0%	18.9%	5.1%	3.0%
③うまくいくかわからないこと でもがんばって取り組む	44.1%	35.3%	14.3%	5.6%	45.3%	36.1%	13.9%	3.0%
④自分は役に立たないと 強く感じる	15.4%	22.0%	27.3%	32.5%	13.2%	17.6%	32.8%	35.1%
⑤友達と関わることができる	71.7%	22.0%	3.5%	3.5%	75.0%	19.9%	4.4%	1.0%
⑥自分のことを 振り返ることができる	39.5%	39.5%	15.0%	6.3%	44.6%	35.8%	11.8%	7.8%

※ 表のアルファベットの記載は「A あてはまる」「B どちらかといえばあてはまる」「C どちらかといえばあてはまらない」「D あてはまらない」とする。

※ ④のみ、C または D の回答が肯定的回答となる

② 全体考察

校内研究の取組により、かかわり合うことや振り返ることによって児童の心を育むことができるということが成果として分かった。研究2年目においても、「子供たちの心を育てることに主眼を置く研究」、「特定の教科に縛られない形で、様々な教育活動の中で行える研究」を校内研究の基本方針とし、「授業や活動のつながりを考え、児童の学びや経験を様々な教育活動に波及させること」、「仲間とかかわり合う活動と自他の学びを振り返る活動を充実させることを通して、自己肯定感や自己有用感を高めること」に焦点を当てて研究を進めていくこととした。

また、校内研究に関連して、本校では以下の取組についても継続的に行ってきた。これらの取組が教員の指導力や児童理解を高め、児童の心の成長につながっていると考える。

- ア 教員の意見や思いを基にする校内研究の方向付け
- イ 授業参観のための週案公開（職員室に掲示）
- ウ 相互授業観察
- エ 全教員の持ち回り講師による月1回以上のOJTの実施
- オ 異学年交流（たてわり班による月1回の遊びや毎日行う清掃活動）
- カ 教科担任制を見据えた異学年間での交換授業
- キ 児童意識調査方法の精選（Q-Uなど諸検査への理解を深める研修会の設定または参加）
 - ※ アからオまでは令和5年度実施
 - ※ カおよびキは令和6年度実施予定

③ 研究の成果

ア 第1回と第2回の実態調査の結果を比較すると以下の傾向が見られた。

（ア） ②を除く項目で「A あてはまる」と回答した児童が増加。

（イ） ②を除く項目で肯定的（AまたはB※④のみCまたはD）な回答をした児童が増加。

イ 二度に渡る実態調査を行い、分析をしたところ、全学年で数値の上昇が見られた。特に、自己肯定感や自己有用感、友達と関わることができるといった設問では、全校での数値、学年ごとの数値、どちらで見ても大きな伸びが見られた。これは、研究の手だてとなる「かかわり合う活動」と「振り返る活動」が充実するよう、日々の教育活動の中で継続的に取り組んできた成果と言える。

ウ 研究仮説に挙げたとおり、教員が、児童の互いのよさや違いを認め合えるよう促したり、価値付けたりすることで、児童一人ひとりのもつよさを捉え、肯定的な反応を積み重ねることができた。このことから、日々の教育活動の中に「かかわり合う」、「振り返る」活動を意図的に計画し、充実した実践を積み重ねれば、互いのよさを認め合い、輝くことのできる児童が育つと言える。

(2) 課題

年3回の研究授業や事前授業、事後学習での学びが日々の活動に生かし切れていないという点である。今後は、「4 研究の成果と課題および課題に対する取組状況 (1) 研究の成果 ② 全体考察」に示した取組を継続しながら、研究授業等での学びを全教育活動にどのように波及させていくかを教員が意図的計画的に設定したり、一年間という期間を見通した取組を行い、その成長を見守り、支えたりしていく必要があると考える。

選定委員より<この論文の「よさ」について>

- ★深い学びを考える上で、「振り返」に着目し、その方法（考え）を具体的にしたことは、大変すばらしい研究となった。
- ★児童の育成と同時に、教員の力量の高まりも一定程度わかる点。
- ★校内研究の取組として、日常的に「かかわり合う」、「振り返る」活動を取り入れた意欲が伝わる。
- ★「関わり合う活動」、「振り返る活動」を軸として、教科だけでなく様々な教育活動で実践し、また、調査を通して具体的に成果を検証していること。
- ★がかわりや振り返りの活動の充実から心の育ちに繋げている点。